

## 雑誌『ニューQ』

株式会社セオ商事

2018 年 12 月

97 頁、1,500 円（税別）

哲学プラクティスの実践者たちが編集した「新しい問いを考える哲学カルチャーマガジン」『ニューQ』が2018年12月に発刊された。第一号は「新しい問い号」という。こんな雑誌が可能だったのかという心地よい衝撃が第一印象である。この雑誌は、あくまで問いかけるといふ形にこだわって、哲学の知的な面白さをより多くの読者に知ってもらおうとする意図を持っている。独断を承知でいえば、これまで哲学という分野は、難解さとありがたさを混同して、哲学に関心を持ちながらも「哲学は楽しい」と断言できないでいた一般の人と、よくいえば職人肌、悪くいえば社会的な視野の狭い、しかし哲学の楽しさをほとんど見失ってしまった専門家のあいだでのすれ違いで成り立っていたと言えるだろう。本誌は、そのどちらも退け、哲学の本質は何より問いを作り出すこと、そしてそれを他者と共有し、対話することにあるのだという、評者から見れば正しい確信に基づいて、哲学の楽しさと面白さを紙面全体で表現しているのだ。特徴的なことは、哲学とは、知識や情報というモノではなく、問うという人間の行為なのだという考えに立っている点だ。そこ

から、小説家の平野啓一郎、哲学を論じる音楽家でありゲーム製作者の犬飼博士、哲学者の寺田俊郎に対して、人物に焦点を当てながらインタビューをして、彼らの哲学的問いを探っていく。問いも思考も、紙面上の記号ではなく、人間の行いなのである。視野の狭い専門家は、人間の存在を捨象した概念や書物という物に興味を持つ傾向があるが、哲学をするときにはこれは厳に慎まなければならないことだ。フェティシズムこそ権威主義の始まりであり、権威主義は哲学の反対語であるからだ。これはすごいと思ったのは、図書紹介ではなく、論文紹介というコーナーだ。論文を精緻に読む楽しさを体験できるだろう。これは、哲学することを愛し始めたときの気持ちを維持し続けられている者だけが思いつくコーナーだ。初恋の味。これ以外にも、SF作家、麦原遼の哲学的な問いを誘発するための短編小説、ノートや漫画、詩と内容は盛りだくさんである。これらの豊富な内容を窮屈に見せていないのは、厚手の紙質と見事な割付、そしてカラフルで鮮明な美しい写真たちである。年二回刊行の予定で、企画はすでに7年分くらいあるとのことである。

河野哲也（立教大学文学部）